



TITLE:

日本語の受益構文の格表示と物の授受性--認知言語学的アプローチ

AUTHOR(S):

澤田, 淳

CITATION:

澤田, 淳. 日本語の受益構文の格表示と物の授受性--認知言語学的アプローチ. 言語科学論集 2007, 13: 71-83

ISSUE DATE:

2007-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/88060>

RIGHT:

日本語の受益構文の格表示と物の授受性

ー認知言語学的アプローチー

澤田 淳

京都大学大学院／日本学術振興会

juns0807@yahoo.co.jp

1. はじめに

本稿では、日本語の受益構文について考察を行う（ここでの受益構文は、「てあげる」「てやる」構文を指す）。受益構文について重要なのは、如何なる場合に与格名詞句が生起可能となるのかという点である。

たとえば、次の(1)では与格名詞句が生起し得る（ここでの与格名詞句は、動詞「見つける」の項ではない点に留意されたい）^{注1}。

- (1) 太郎は花子に仕事を見つけてあげた。 (*太郎は花子に仕事を見つけた。)

受益構文では、一見すると、二者間の受益関係が成立してさえいれば、受益者を示す与格名詞句が生起可能であるように思われる。しかし、二者間の受益関係が成立していても、与格名詞句が生起不可能な(2)のような例が存在する。

- (2) *太郎は花子に仕事を休んであげた。 (*太郎は花子に仕事を休んだ。)

(2)は、「太郎」が「花子」を看病するために仕事を休んだといった二者間の受益関係が明確なコンテキストの中においても、決して適格とはなり得ない。この事実は、受益構文における与格名詞句の生起の問題には、「恩恵性」「受益性」以外の要因も関与していることを示している。

本稿の目的は、受益構文において与格名詞句が如何なる場合に生起可能となるのかを認知言語学的な観点から明らかにすることである。

2. 先行研究とその問題点

三宅(1996)は、受益構文における与格名詞句の生起の問題に関して、動詞に注目した分析を試みている。次の例を見てみよう。

- (3) *花子は太郎に踊ってやった/ゆっくり歩いてやった/黙ってやった
(4) *花子は太郎に神を信じてやった/結婚を考えてやった/幸せを願ってやった

- (5) *花子は太郎にドアをたたいてやった/背中を押してやった/テーブルを拭いてやった
- (6) *花子は太郎に部屋から出てやった/会社に行ってやった/橋を渡ってやった
- (7) *花子は太郎に靴を磨いてやった/ビールを冷やしてやった/部屋を暖めてやった/
ゴミを焼いてやった/髪を切ってやった

(三宅 1996: 2)

三宅 (1996: 2) によれば、(3) は動作動詞、(4) は(精神的) 働きかけ動詞、(5) は(物理的) 働きかけ動詞、(6) は移動動詞、(7) は対象変化動詞の例であり、これらの動詞が受益構文に生じた場合、与格名詞句の生起は不可能になるという(ここでは、「太郎に」を削除するか、「太郎のために」の形にすれば受益構文が適格になるとする)。

一方、次のような動詞が受益構文に生じた場合、与格名詞句が生起可能になるとする。

- (8) 花子は太郎に絵を描いてやった/セーターを編んでやった/湯を沸かしてやった

(三宅 1996: 2)

ここでの「(絵を) 描く」、「(セーターを) 編む」、「(湯を) 沸かす」は、いずれも「作成動詞」(何かを生産することを表す動詞。対格名詞句がその生産物)である。

以上の観察を基に、三宅 (1996: 3) は次の一般化を提示する。

- (9) 受益構文において与格名詞句の生起を許す動詞は、典型的には作成動詞である。

(三宅 1996: 3)

この一般化によれば、次のような例の適格性の違いも説明できるとする。

- (10) 花子は太郎にケーキを焼いてやった/*ゴミを焼いてやった
- (11) 花子は太郎に色紙で鶴を折ってやった/*ズボンの裾を折ってやった
- (12) 梅さんはひろしに寿司を握ってやった/*手を握ってやった

(三宅 1996: 2-3)

同じ「焼く」、「折る」、「握る」でも、「ケーキを」、「鶴を」、「寿司を」の場合は作成動詞、「ゴミを」、「ズボンの裾を」、「手を」の場合は対象変化動詞であり、上の適格性の違いは、(9) の一般化から説明できるという。

三宅 (1996) は、作成動詞が与格名詞句の生起を可能にするメカニズムを次のような語彙概念構造を用いて説明する。

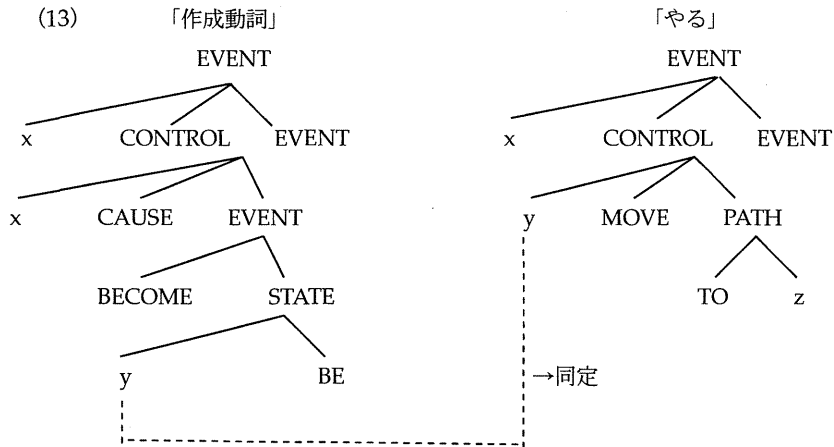


図1

図1が示すように、作成動詞の場合には、「補助動詞“やる”の概念構造における“MOVE”の項“y”と適切に同定され得る項が、前接する動詞の語彙概念構造において存在する」という(図1では、項“y”が同定されている点に注目されたい)。その結果、「モノの移動が成立することになり、補助動詞“やる”は本動詞の場合とほぼ同様の語彙概念構造を維持でき」、「[着点] 名詞句の生起も可能になる」という(三宅1996: 9)。

一方、前接する動詞が作成動詞以外の場合は、下の図2が示すように、「“MOVE”の項“y”と適切に同定できる項の存在が含意されない」という。このように、「作成動詞以外の場合は、移動物として解釈される項の同定が不可能であることから、語彙概念構造において、当該の部分は抽象化を被って」おり、「モノの移動が成立しないことを示すことになるので、[着点] 名詞句の生起は不可能になる」という^{注2}。

(14) 前接する動詞が作成動詞以外の場合の「やる」

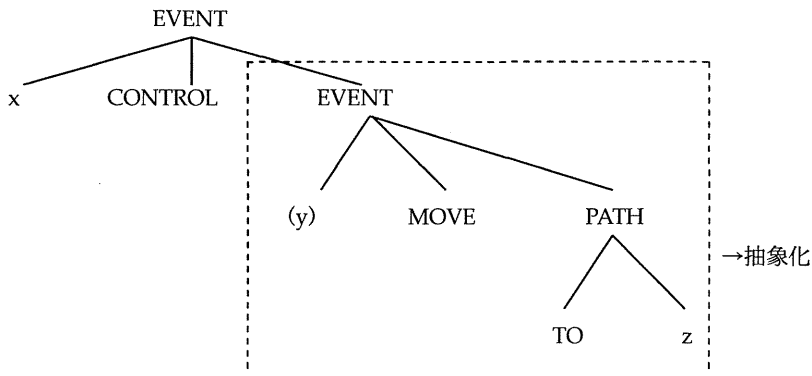


図2

三宅（1996）の分析は、受益構文において与格名詞句が生起可能となる条件を、前接動詞との関係から明確な形で示したものであり、また興味深い事実観察もなされているが、幾つかの本質的な問題点が存在する。

第1に、作成動詞でなくても、与格名詞句が生起し得る次のような例が説明できない。

- (15) 息子に講義録をとってやって、それで中学教育をさせているような顔をした。
(松本清張「父系の指」)
- (16) 裁判を起こし、無国籍の混血孤児に国籍を取ってやったりもした。
(『朝日新聞』1988年5月2日、夕刊)
- (17) 四歳の孫に、ポケモンの人形を買ってやった。
(『朝日新聞』1998年6月28日、朝刊)
- (18) 高学年の小学生が小さな子にセミの抜け殻を集めてあげたり、ミミズを捕まえてあげたりする光景も見られるようになった。
(『讀賣新聞』2002年12月7日、朝刊)
- (19) 我が子にきちんとした居場所を見つけてあげたい。
(『讀賣新聞』1999年5月16日、朝刊)

「取る」、「買う」、「集める」、「捕まえる」、「見つける」は、「作成動詞」ではなく、「獲得動詞」である（なお、これらの動詞は、「～ガ～ヲ V」のパターンを取る二項動詞であり、与格名詞句を項として取らない点に留意されたい）。

第2の問題点は、本動詞「やる」（「あげる」）の語彙概念構造と、問題の「てやる」（「てあげる」）の語彙概念構造を同一なものとなししている点である（三宅 1996: 9）。

この問題点を、次の（20a）、（21a）の例を基に明らかにしてみよう。

- (20) a. 太郎は子供にすいかを切ってあげた。
b. 太郎は子供に〔すいかを切っ〕てあげた。
- (21) a. 太郎は子供に缶詰を開けてあげた。
b. 太郎は子供に〔缶詰を開け〕てあげた。

ここでの「てあげる」が、対格名詞句を直接的な項として取ると分析した場合、「（切られる前の）すいか」、「（開けられる前の）缶詰」が「花子」に渡るという誤った予測がなされてしまう。ここでは、「（切られた後の）すいか」、「（開けられた後の）缶詰」が「花子」に渡ると分析されなければ、正しい意味解釈ができない。すなわち、（20b）、（21b）のブラケット（角括弧）の構造表示が示すように、（20a）、（21a）の対格名詞句は、前接動詞「切る」、「開ける」の項であり、「てあげる」の項ではない。この点で、次の本動詞「あげる」とは異なる構造をなす。

- (22) 太郎は花子にすいかをあげた。
- (23) 太郎は花子に缶詰をあげた。

本稿では、本動詞「あげる」は対格名詞句を項として取るのに対し、問題の補助動詞「てあげる」は事象(「XガZヲV」)全体を項として取るとみなし、両者の構造を明確に区別することを提案する。

3. 本稿の分析

3.1. 受益構文と物の授受

本稿では、問題の受益構文において、与格名詞句が生起可能なのは、次のような場合であると考えられる。

- (24) 受益構文では、主語名詞句の行為によってある物が主語名詞句の所有領域内に出現し、その物を主語名詞句がある者に授与するという意図を持つ場合に、その者は与格名詞句でマークされ得る。

問題の受益構文を図示したのが次の図である。

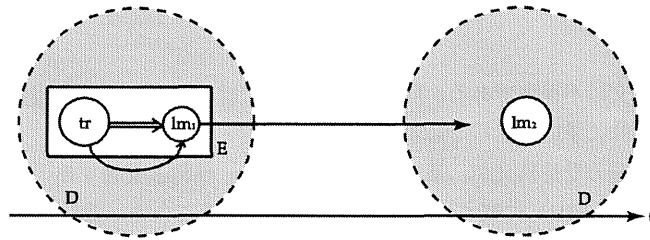


図3

図3において、trは、埋め込み文(E)内の動詞(二重矢印)が示す行為者と、物(1m₁)の授与者の役割を兼務する主語名詞句である。一方、1m₂は、物(1m₁)の受領者と行為の受益者を兼務する与格名詞句である。Dは、授与者(tr)、受領者(1m₂)それぞれの所有領域(D)を表す。物(1m₁)は、埋め込み文(E)内の動詞が示す行為により出現する。一重矢印は物(1m₁)の移動を表す。また、trから伸びる半円の矢印は、trが1m₁に力行使することによって1m₁を移動させる力動性(force dynamics)を表す。

たとえば、次の例は、「花を摘む」という「太郎」の行為によって、「花」が「太郎」の所有領域内に出現し、「太郎」がその「花」を「花子」に授与する点を示される。

- (25) 太郎は花子に花を摘んであげた。

(24)の特徴づけは、次のことを含意する。すなわち、問題の受益構文では、夕形で表されても、与格名詞句で示される者が物を所有するに至ったことまでは含意されない。この点で、本動詞の「あげる」と異なる。たとえば、次のa文とb文を比較してみよう。

- (26) a. 太郎は花子に新幹線のチケットをあげた。
 b. 太郎は花子に新幹線のチケットを予約してあげた。
- (27) a. 太郎は花子にピザをあげた。
 b. 太郎は花子にピザを注文してあげた。

ここでは、当該の出来事が過去時において実現したことが示されるが、a文と異なり、b文では、与格名詞句で示された者が「チケット」や「ピザ」を受け取ったことまでは含意されない。すなわち、主語名詞句から与格名詞句への物の授与が成立していなくても、主語名詞句がその成立を意図していれば、問題の受益構文は適格となり得るのである。

ただし、当該の物を相手に渡そうとする意図が相手に渡る直前まで継続していなければ、この構文は不適格となる。次の例を比較してみよう。

- (28) a. この万年筆は当初花子のために買ったのだが、気が変わり彼女に渡すのをやめた。
 b. *この万年筆は当初花子に買ってあげたのだが、気が変わり彼女に渡すのをやめた。

a文と異なり、b文は不適格である。問題の受益構文では、渡そうとする当初の意図が途中で変わった場合、意味に矛盾が生じてしまうのである。

この事実は、問題の受益構文が、基本的に、英語の for 与格と交替する「受益二重目的語構文」(用語は、高見 (2003) に従う) に対応した構文であることを示唆するものである (澤田 2006)。次の (29) の文法性の違いは、(28) の文法性の違いと平行的である。

- (29) a. I baked a cake for Max, but now that you're here, you may as well take it.
 b. *I baked Max a cake, but now that you're here, you may as well take it.

(Oehrle 1976: 109)

日本語では、与格名詞句を実現させるためには、前接動詞に「てあげる」、「てくれる」といった補助動詞を付けて形態的に複雑な述語として示す必要がある (岸本 2001, 澤田 2006)。

- (30) John built Mary a house.
- (31) a. *太郎は花子に家を建てた。
 b. 太郎は花子に家を建ててあげた。

この形態的な違いは、両言語の構文が表す「恩恵性」の所在の違いでもある。すなわち、日本語の受益構文が表す「恩恵性」は、補助動詞「てあげる」「てくれる」の語彙的意味によるものであるのに対し、英語の受益二重目的語構文が表す「恩恵性」は、特定の語彙によるものではなく、二重目的語構文という構文的意味 (Goldberg 1995) によるものである。

このような形態面での相違はあるものの、与格名詞句（間接目的語）が動詞自体の項ではない点や、共起する動詞の範囲が基本的に重なる点（3.3節）など、問題の日本語の受益構文と英語の受益二重目的語構文は基本的な特徴を多く共有している^{注3}。

3.2. 物の特性

本節では、受益構文における物の特性を二つの角度から検討する。

第1に、授与される物は、与格名詞句にとって益となる物でなければならない。

- (32) a. 太郎は花子にきれいな貝殻を拾ってあげた。
b. *太郎は花子にきたないゴミを拾ってあげた。

b文が不自然なのは、「きたないゴミ」は、通常、受領者にとって益となる物とは考えにくいためである（ただし、「花子」が「きたないゴミ」を集めているといった特別なコンテキストの下では自然となる）。

さらに、次の例を比較してみよう。

- (33) a. 花子は大好きなケーキを作った。
b. 花子は子供に大好きなケーキを作ってあげた。

「大好きな」は、a文では「花子の大好きな」と解釈されるが、b文では「花子の大好きな」という解釈よりも、「子供の大好きな」という解釈が自然である。

問題の「てあげる」構文は、「与格名詞句にとって益となる物の授与」を表すとみなせば、これらの事実が説明できる（与格名詞句は、恩恵の受け手（受益者）であると同時に、物の受け手（受領者）として機能するのである）。

第2に、授与される物は具体物とは限らない。次の例では、（実質的な存在物とは言い難い）「穴」が授与物となっている（ただし、厳密には「穴」自体が物理的に与格名詞句へと移動しているわけではない。その所有権が与格名詞句に移っている）。

- (34) 太郎は花子に穴を掘ってあげた。

さらに、授与される物が対格名詞句で表されない例もある。

- (35) 太郎は花子に本を読んであげた。

ここでは、対格名詞句の「本」ではなく、「声」を伴った「(本の) 内容」が授与されている。ここでは、「声」が一種の物として見立てられている（三宅1996: 10, 澤田2006: 116）。

「本を読む」という行為は、「黙読」と「朗読」の両方がある。しかし、問題の受益構文の中では、「朗読」の意味に限定される。次の例は不適格である。

- (36) (花子の勉強のじゃまにならないように)
*太郎は花子に声に出さずに本を読んであげた。

また、「論文を読む」を「黙読」の意味に限定した次の例も、不適格である。

- (37) (太郎が学生の論文を添削したという状況)
*太郎は学生に論文を読んであげた。
(cf. 太郎は学生の論文を読んであげた。)

次の例の適格性の違いも、同様の観点から説明される。

- (38) a. 太郎は花子に笛を吹いてあげた。
b. *太郎は花子にロウソクの火を吹いてあげた。

a 文では、「笛」ではなく、笛を吹くことによって作り出された「音色」が物として移動する。同じ「吹く」でも、b 文の「ロウソクの火を吹く」という行為からは作成物が認められない。それゆえ、物の授受が想定されず不適格となる。

3.3. 動詞の範囲

受益構文と共起する動詞としては、「作成動詞」、「獲得動詞」、および、「作成動詞」に準じた解釈が可能な一部の「対象変化動詞」があげられる。これらの動詞によって表される行為は、授受行為の前段階の行為であり、二つの行為が時間的に連続した行為として自然に結びつく。すなわち、これらの動詞によって表される行為と、「てあげる」によって表される授受の行為の間には、「時間的に隣接した使役関係」(temporally contiguous causal relationship) (Goldberg 1995: 62) が認められるため、2つの事象が自然な形で融合し得るのである (澤田 2006: 114) 注4。

この分析によれば、次の例の適格性の違いが自然に説明できる。

- (39) 太郎は花子に {蝶々を捕まえ / *蝶々を放し} てあげた。
(40) 太郎は花子に {絵を描く / *落書きを消し} てあげた。

「蝶々を捕まえる」、「絵を描く」と異なり、「蝶々を放す」、「落書きを消す」という行為からは、授受の対象となるべき物が主語名詞句の手元に出現せず、「物の授受」の前段階の行為として機能しない。それゆえ、前者と異なり、後者は不適格となる。

さらに、次の例の適格性の違いも説明できる。

- (41) a. 私は花子にすいかを切ってあげた。

b. ??私は花子に爪を切ってあげた。

ここでの両文は、いずれも「切る」という「対象変化動詞」で表されている。しかし、a文に比べb文は容認度が低い。この容認度の差は、当該の行為が「物の授受」の行為と自然な関係づけを持つか否かの違いによる。すなわち、「(切られた) すいか」は授受の対象物として自然に解釈できるが、「(切られた) 爪」は、通常、授受の対象物としては解釈されないのである。

重要なことは、「物の授受」の前段階の行為として機能し得る動詞は、三宅(1996)の言うような作成動詞に限定されるものではないということである。

3.4. 「領域」の拡張

本節では、受益構文の拡張のケースの一つとして、「領域」の拡張を取り上げる。

次の例を見てみよう。

(42) 太郎は花子にタクシーを呼んであげた。

(43) 太郎は花子にボディーガードを雇ってあげた。

ここでの「タクシー」、「ボディーガード」は、「太郎」の「所有領域」から移動したわけではない(「太郎」は、「タクシー」や「ボディーガード」を所有していたわけではない)。それゆえ、この種の例は、(24)の特徴づけには厳密には適合しない。しかし、ここでの「タクシー」、「ボディーガード」は、「太郎」が呼んだり、雇ったりした対象であり、「太郎」の「支配領域」(または、「コントロール領域」)に存在する対象とみなすことは可能である。「支配領域」は、「所有領域」からの拡張として自然に捉えることができる。

この議論を踏まえて、次の例を考えてみよう。

(44) 太郎は花子に新聞を取ってあげた。

この例は、2つの解釈に多義的である。1つは、「太郎」の「所有領域」から新聞が移動するという解釈である。次の例はこの解釈となる。

(45) 太郎は花子に(テーブルの上にある)新聞を取ってあげた。

もう1つは、「太郎」が「花子」のもとに新聞を配達するよう手筈を整えたという解釈である(この場合、「太郎」自身が新聞を所有していたわけではない)。次の例は、この解釈が優先される。

(46) 太郎は花子に(一年間)新聞を取ってあげた。

(44)が多義的な解釈を許すという事実は、受益構文において、「所有領域」以外に、「支配

領域」を設定することが妥当であることを示している。

4. おわりに

本稿では、受益構文において与格名詞句は如何なる条件下で生起可能となるのかの問題について考察を行った。本稿の分析から、受益構文において与格名詞句が生起可能か否かは、ひとえに、我々が当該の状況から、主語名詞句から与格名詞句への「物の授受」を想定できるか否かにかかっていることが明らかになった。

本稿で論じた与格名詞句生起の問題は、謙譲語である「お～する」構文でも問題となる現象である（益岡 2007: 64）。たとえば、次の例を見てみよう。

- (47) a. 先生に夕食をお作りした。
b. 花子に夕食を作ってあげた。
- (48) a. 先生におかずをお取りした。
b. 花子におかず取ってあげた。
- (49) a. 先生にすいかをお切りした。
b. 花子にすいかを切ってあげた。
- (50) a. ??先生に爪をお切りした。
b. ??花子に爪を切ってあげた。
- (51) a. *先生にドアをお閉めした。(cf. 先生にドアをお開けした。)
b. *花子にドアを閉めてあげた。(cf. 花子にドアを開けてあげた。)
- (52) a. *先生にテーブルをお拭きした。
b. *花子にテーブルを拭いてあげた。

(47a) - (49a) と異なり、(50a) - (52a) の「お～する」構文では、与格名詞句の生起が許されない。この点で、「てあげる」構文と基本的な振る舞いを共有する。

「お～する」構文は、動作の受け手が敬意の対象であることを表すが、「てあげる」構文と同様、そこでの受け手は、物の受領者をマークする場合にのみ、与格名詞句として実現し得ると言える^{注5}。

今後、さらに多くのデータを基に検討を加えていきたい。

[付記]

本稿は、2004 年度日本語用論学会第 7 回大会（於：神奈川大学）での発表内容「日本語の受益構文における格表示について」に基づいている。

注

1. 「送る」のような本来的に与格名詞句を項として取る動詞は、受益構文においても与格名詞句を生起させることができるが、これは当然の現象であるため、考察の対象には含めない。

- (i) 太郎は花子に荷物を送ってあげた。(太郎は花子に荷物を送った。)

筆者は、澤田(2006)で、(1)のような受益構文を「与格外在型受益構文」、(i)のような受益構文を「与格内在型受益構文」と呼び、両者を区別した。本稿で問題とするのは、前者の「与格外在型受益構文」である。

2. 三宅(1996: 9)によれば、(3)の「動作動詞」では、そもそも項“y”が存在しないし、(4)、(5)の「働きかけ動詞」や、(6)の「移動動詞」も、項“y”は、事態の最終状態において存在することを表すわけではなく、補助動詞「やる」の項“y”と同定するには適切ではないと言う。また、(7)の「対象変化動詞」は、「作成動詞」とは異なり、その最終状態は「叙述」であって、項の存在を積極的に示すものではないため、やはり同定するには不適切であるとみなし得るとしている。
3. ただし、生起する動詞の範囲は、完全に一致するわけではない。たとえば、英語の受益二重目的語構文では、“kill”, “hit”のような動詞が生起し得るが(Green 1974, 高見 2003)、日本語の受益構文では、この種の動詞は生起できない。

- (i) a. They're going to kill Reagan a hippie. (Green 1974: 95)
b. Babe Ruth hit his team and fans another big home run. (高見 2003: 707)
- (ii) a. *太郎は遺族に犯人を殺してあげた。
(cf. 太郎は遺族のために犯人を殺した。)
b. *ベーブブルースはチームにホームランを打ってあげた。
(cf. ベーブブルースはチームのためにホームランを打った。)

高見(2003: 708)は、英語の(for 与格と交替する)受益二重目的語構文に対し、「主語指示物の行う行為が、間接目的語指示物のためになされる/たと容易に解釈され、間接目的語指示物が行う行為により何らかの利益を受ける/たと解釈される場合にのみ、適格となる」とする機能的制約を与えている。高見(2003)の分析のポイントは、間接目的語指示物が物を受領(または、所有)することをこの構文の適格性条件としていた従来の分析の代案として、新たに、間接目的語指示物が利益を受けることをこの構文の適格性条件とした点にある。

一方、問題の日本語の受益構文は、(ii)の不適格性が示すように、主語名詞句が相手のために恩恵的な行為を行うというだけでは成立できず、「物の授受」が想定される必要がある。すなわち、問題の日本語の受益構文における与格名詞句は、恩恵の受け手(受益者)であると同時に、物の受け手(受領者)でなければならないのである(ただし、上述したように、与格名詞句が物を受け取ることまでは含意されない)。

4. 対象変化動詞が生起する例としては、次のような例が挙げられる。

- (i) 太郎は花子に魚を焼いてあげた。
- (ii) 太郎は花子に鉛筆を削ってあげた。

(iii) 太郎は花子に缶詰を開けてあげた。

ただし、「対象変化動詞」の例は、容認性の判断が揺れるケースが多い。たとえば、「私は太郎に洋服をたたんであげた」、「私は太郎に靴を磨いてあげた」、「私は太郎にコップを洗ってあげた」などは、その容認性の判断が揺れる（ただし、「私は太郎にゴミを焼いてあげた」、「私は太郎に絵を消してあげた」などの「物の消失」を表す対象変化動詞は、物自体が存在しなくなるため、明らかな不適格性を示す）。

「作成」、「獲得」の行為は、その行為がなされてはじめて「物の授受」の行為が成立する（その行為がなされなければ、与えられるべき物が存在せず、「物の授受」の行為も成立しない）。この意味で、「作成」、「獲得」の行為は、「物の授受」の行為の厳密な「前条件」(precondition)を満たしている (Goldberg (1995: 65) 参照)。一方、「対象変化」の行為は、その行為を行うか否かに関わらず、物自体は既に存在しており、その行為がなされなければ「物の授受」行為が成立しないというわけではない。すなわち、「物の授受」の行為の厳密な「前条件」を満たしているわけではない。

「対象変化動詞」の例が、「作成動詞」、「獲得動詞」の例に比べ、容認性の判断が揺れるケースが多いのは、「対象変化」の行為の場合、「物の授受」の行為の「前条件」を満たしていないという意味で「物の授受」行為との緊密さが相対的に低いためであると考えられる。

5. 次の例における与格名詞句は、動詞「貸す」、「送る」自体の項であり、この点で、(47a) - (49a) の例における与格名詞句とは区別される。

- (i) 先生に本をお貸しした。
- (ii) 先生に本をお送りした。

参考文献

- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Green, Georgia M. 1974. *Semantics and Syntactic Regularity*. Bloomington: Indiana University Press.
- 岸本秀樹 2001. 「二重目的語構文」 影山太郎 (編) 『日英対照動詞の意味と構文』 127-153. 東京: 大修館書店.
- 益岡隆志 2007. 『日本語モダリティ研究』 東京: くろしお出版.
- 三宅知宏 1996. 「日本語の受益構文について」 『国語学』 186: 1-14.
- Oehrle, Richard Thomas 1976. *The Grammatical Status of the English Dative Alternation*. MIT dissertation.
- 澤田淳 2006. 「「X ガ Y ニ Z ヲ V てやる/てくれる」構文の意味的・統語的特性」 *Proceedings of the Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society*. 26: 111-121.

- 澤田淳 2007a. 「主観性/客観性」から見た現代日本語の授受構文について—「話し手/主語指向性」、「受け手/与え手指向性」の観点から—」 *Proceedings of the Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society*, 27: 1-11.
- 澤田淳 2007b. 「日本語の授受構文が表す恩恵性の本質—「てくれる」構文の受益者を中心として—」『日本語文法』7(2): 83-100. 東京: くろしお出版.
- 高見健一 (2003) 「受益二重目的語構文の動詞と適格性条件」『英語青年』148(11): 706-708. (2月号)